

会員数 58名
欠席者

出席者31名・欠席者18名・免除会員9名
有家・麻田・飯間・石合・和泉享・加内・川原・松山・中野昌・曾川
松村・大西・大山・齊賀・谷川・谷本・山本広・会員

前々回出席率 64.8% (1/17)

MARUGAME ROTARY CLUB WEEKLY

会 長 和泉 清憲
幹 事 細谷 誠
会報委員長 大西 信亮

お知らせ

- 3月のプログラム
 - 2 (No.1)-客話
 - 9 (No.2)-60周年特別委員会
 - 16 (No.3)-休会
 - 23 (No.4)桜の植樹
 - 30 (No.5)IM報告

ニコニコBOX;なし

<ニコニコ会計累積/ ¥278,000>

がんばるBOX;なし

<がんばる会計累積/ ¥136,500>

例会場・事務局

丸亀市塩飽町50-3 丸亀プラザホテル内

■例会事業;市民講座 藤井紀子会員 「丸亀のDNA~丸亀にドイツの風が吹いた」

本日は短い時間ですが皆様にドイツが身近に感じていただければと思います。ドイツの国旗は、上から、黒、赤、金の三色が並び、この色が「自由と統一の象徴」で、黒が勤勉、赤が情熱、金色が名誉を表すとも言われています。面積的には日本とほぼ同じで、人口は日本の約3分の2くらいです。首都はベルリンで、9つの国と国境を接しています。日本とドイツの関係は、1861年の日本・プロイセン修好通商条約から国交が始まり、明治には岩倉使節団が欧米各国を歴訪し、ベルリンなどの都市にも約3週間滞在しました。ドイツから1000人を超えるお雇い外国人が来日するなど、国家レベルでドイツから学ぶことに力を入れ、ベルツやナウマンなどから学び、森鷗外や北里柴三郎や滝廉太郎はドイツに留学しました。



1914年第一次世界大戦が勃発しました。戦場はヨーロッパから遠く東アジアにまで飛び火し、日本軍は日英同盟を口実にドイツが租借地としていた青島を攻め込みます。ドイツ兵は少数であったため戦闘は短期間で終了し、4,500名を超えるドイツ人俘虜が生まれ、日本各地の収容所に移送されることとなりました。そうして、1914年11月16日、全国で12カ所あった収容所の一つである丸亀の本願寺塩屋別院に、ドイツ人俘虜324名がやってきました。塩屋別院は、当時の俘虜収容所のうち唯一残っている建物です。収容されてすぐ、ランセル大尉から、①食事の増量、②ビール許可、③酒保(バー、売店)を開く、④将校は自由に散歩の4項目の請願があり、早速次の日より請願通り実施することになりました。

これは収容所内部の写真です。かなりぎゅうぎゅうな感じです。こちらの写真はスポーツをしているところで、俘虜たちはサッカーを楽しんでいたのでしょう。この写真は演劇で、お芝居を見て楽しんでいます。俘虜にとっての生活は決して悪いものでなかったと思われれます。忘れてはいけないのは音楽活動で、この写真の中心に立つパウル・エンゲルは、俘虜仲間とともに寺院楽団(後に保養楽団)を結成して、20回以上の演奏会を開き、市民との交流もありました。音楽は国境を越えますね。また、1917年、俘虜製作品展覧会が開かれ、3万人もの丸亀市民が見学に訪れ大好評を博しました。椅子、時計などほとんど売れたと当時の新聞が報道しました。日本人がドイツ人俘虜たちに対して、個人を尊重した人道的な扱いができたのはなぜでしょうか。「俘虜」は捕虜ではなく、人道的に扱うことが国際法で定められています。列強の仲間入りを望んでいる日本にとって、国際法を遵守することが大切でした。お接待文化も支えになったと思います。また、もうひとつには、当時世界の先進国だったドイツの俘虜から優れた技術・文化を学ぶ絶好の機会と捉えられたからです。

1917年4月の俘虜製作品展覧会から1か月後、俘虜たちは鳴門市にある坂東俘虜収容所に移転収容されました。丸亀での生活は約2年5か月でした。2006年の映画バルトの楽園で坂東収容所が描かれました。松江豊壽所長を支えていた副官の高木繁は丸亀出身で、得意のドイツ語を駆使しながら、俘虜とのパイプ役を果たしました。さて、丸亀では夏に「ビールとドイツ音楽の夕べ」、冬には「まるがめ第九プレコンサート」「まるがめ第九演奏会」が開かれています。また、丸亀市は海外に姉妹都市や友好都市がありますが、その国に関連した市民も参加できるイベントが毎年定期的に行われているのはドイツだけです。

昨年の広報まるがめに、ドイツ・ヴイリッヒ市・・・藤井学園の姉妹校提携の記事があります。ヴイリッヒ市は大きな都市ではありませんが、州別の人口が最も多く、経済規模も非常に大きいノルトライン・ヴェストファーレン州にあり、日系企業も約20社進出しています。クリスティアン・パクシュ市長は30代の若き市長です。市のシンボリックな建物はネルゼン城で、現在もヴイリッヒ市の市庁舎として使われています。丸亀城にも通じる場所があると思います。

さて、姉妹校提携に至るまでのドラマを紹介します。2011年5月に藤井学園の藤井睦子理事長が訪独し、在デュッセルドルフ日本国総領事と面会しました。翌年の2012年5月11日です。「Spring Breeze from Japan(日本からの春風)」と題して、特別講演会と演奏会を開催し、当時の伊澤肇一常務理事が丸亀市民とドイツ兵俘虜の交流について前述のような内容を講演しました。ドイツ人にとって、あまり知られていない歴史の事実で、驚かれる方がたくさんいらっしゃいました。2016年6月に、藤井学園関係者が訪独し、聖ベルンハルト・ギムナジウムとの間で、姉妹校提携に向けての協議を開始しました。海外に姉妹校を持つというのは初めての経験です。約1年後、様々な方の支えもあり姉妹校提携を、ハイエス市長の配慮もありネルゼン城で行われました。

姉妹校提携の内容は、偶数年は藤井学園から聖ベルンハルト・ギムナジウムに、奇数年はその逆に、相互に生徒を派遣しあいます。相手の国の理解を深める機会になるので、生徒1名につき1家庭でのホームステイ形態になりました。2018年3月、生徒は7名、大人は、3名が聖ベルンハルト・ギムナジウムを10日間訪問しました。生徒たちは不安もあったかもしれませんが、大きな期待をもって訪独しました。生徒たちは、茶道や折り紙などで日本文化を紹介しました。教員は持ってきたまわしをつけて相撲を披露したり、丸亀市の紹介やうちわ産業の歴史について社会の授業を行い、大変盛り上がりしました。

2019年4月、聖ベルンハルト・ギムナジウムからは生徒11名、教員2名がやってきました。一緒に大運動会を楽しみ、友情の証に記念植樹をしました。ドイツにはない入学式にも出席しました。週末はホストファミリーに任せて、桜を見に行き、松山に遠出するなど、日本の日常を味わってもらいました。ほんの1週間でも、友情が芽生え深まりました。お別れのときの涙を見ていると、彼らにとって距離は関係ないのだと感じました。

市と市の関係ですが、2016年2月、在デュッセルドルフ日本国総領事館では「丸亀のタベ」が開催されました。姉妹校提携の協議が始まった頃には、ヴァイリッヒ市議会で「丸亀市への友好声明」が承認されました。丸亀市側は2017年7月に石井秘書広報課長がヴァイリッヒ市を訪問し、交流について意見交換がなされました。翌年の2018年、梶市長が訪独し、「友好都市」宣言に調印しました。私もその場にいましたが、ひとつの節目になったと思います。その2か月後、ハイエス市長が丸亀を訪問されました。丸亀城にも上り、骨付鶏やうどんも召し上がりました。ヴァイリッヒ市議会は丸亀市との姉妹都市提携を目指すことが満場一致で決定しました。2020年、学園関係者がヴァイリッヒ市の市制50周年式典に訪問し、式典では梶市長と内田議長がビデオレターを寄せました。翌月には、岩間総領事がデュッセルドルフ赴任前に丸亀を訪問され、今後の展開について意見交換しました。そして、コロナ禍に突入しました。生徒の交流も中断し、市と市の交流も縮小しました。しかし、昨年8月にパクス市長が丸亀を訪問したのです。写真には丸亀に縁の深い元ドイツ大使の神余隆博先生、在デュッセルドルフ日本国総領事の河原節子様も写っており、非常に歴史的な瞬間に立ち会えたと思います。今後、友好関係が拡大していくのではないかと期待を寄せています。

姉妹都市提携が見込まれている2023年は、藤井学園創立100周年です。姉妹都市提携の基盤を作った藤井学園にとっても、記念すべき年に当たっているというのは、運命的なものすら感じます。ドイツ人俘虜は丸亀での生活をみる限り、悲惨な運命というよりもドイツ人俘虜と地域住民との交流・友情という「絆」が生まれました。ドイツ人俘虜が優れた能力や技術や文化を持っていたこと、お接待文化で他人に優しく接する気風があること、「ハーグ陸戦条約」の遵守、相手の尊厳を保つ武士の情けに基づき収容所の運営をしていたことなどから、ドイツ人と地元民の「絆」が築かれたものと思います。それが現在も色々なジャンルやイベントの中で生きていて、ドイツ文化の香りを留めています。かつて自分たちが築いた絆が、約110年の時を経て、まさか姉妹都市提携という形で結実することになるうとは、当時のドイツ人俘虜たちも丸亀の人たちも、全く想像していなかったと思います。

最後に、1914年11月16日ドイツ人俘虜が多度津港に上陸したときのことをご紹介したいと思います。花で飾られた「凱旋門」には、ドイツ語で、ある言葉が書かれていました。Freundlichst, mitleidvoll empfangen! 私の一番好きな和訳は、「心から親しみと思いやりをこめて歓迎します」です。当時、不安な気持ちを胸にやってきたドイツ人俘虜たちを、差別することもなく、敵対することもなく、あたたかい言葉で迎え入れる優しさや心の広さに、驚くとともに、ほっと心があたたまります。いま世界ではロシアとウクライナの問題をはじめ、各地で紛争が絶えません。丸亀にドイツ人俘虜たちをあたたかく迎え入れた先人たちの思い、まさに丸亀のDNAを受け継がないといけなと思います。世界の中で、お互いがお互いを認め合い、世界が平和でありますように願いつつ、私の市民講座を終えたいと思います。

※紙面の都合上、後半の「NISA制度を活用した資産形成(東原隆啓会員)」については次号に掲載させていただきます。ご了承ください。